

『イリアス』における予言の役割

佐野馨

(西洋古典学専門 / 博士後期課程)

はじめに

盲目の詩人ホメロスが創り出したとされる叙事詩『イリアス』はトロイア戦争を題材とし、全24歌(巻)からなる長大な叙事詩である。しかし、その長大さに反し『イリアス』の中で実際に描かれる出来事は10年以上に及んだとされるトロイア戦争のごく一部に過ぎない。そしてその内容は『イリアス』冒頭の数行で端的に記されている。

μηνιν ἄειδε θεὰ Πηληϊάδεω Ἀχιλῆος
ούλομένην, ἣ μυρὶ Ἄχαιοῖς ἄλγε' ἔθηκε,
πολλὰς δ' ἰφθίμους ψυχὰς Ἄϊδι προΐαψεν
ἡρώων, αὐτοὺς δὲ ἐλώρια τεῦχε κύνεσσιν
οἰωνοῖσί τε πᾶσι, Διὸς δ' ἐτελείετο βουλή,
ἐξ οὗ δὴ τὰ πρῶτα διαστήτην ἐρίσαντε
Ἀτρεΐδης τε ἄναξ ἀνδρῶν καὶ δῖος Ἀχιλλεύς. (1.1-7)¹

女神よ、ペレウスの子アキレウスの破滅の怒りを歌え、
数えきれない苦しみをアカイア人たちにもたらし、
勇士たちの多くの力強き魂を冥界へと送り込み、
彼らを犬や鳥の餌食としてしまった、その怒りを。
ゼウスの意思が完遂され、
人々の支配者たるアトレウスの子と神のごときアキレウスの
二人が最初に諍いの後立場を違えたかの時から。

ここにある通り、『イリアス』とはギリシア最大の勇士であるアキレウスの怒りとそれがもたらしたものを描いた物語である。具体的には、ギリシア軍の総大将アガメムノンとの諍いに始まり、それ故生じたアキレウスの不在によるギリシア軍の苦戦と苦難、見かねて飛び出した親友パトロクロスの死、復讐を誓ったアキレウスの戦場への復帰、トロイア最大の英雄にして親友の仇ヘクトルの殺害、その遺体に対する凌辱、ヘクトルの父プリアモスとの対面と遺体の返還等々が描かれ、ヘクトルの葬送で物語は締めくくられる。

かくして『イリアス』の物語は終わるわけであるが、トロイア戦争自体の話にはまだ続きがあるのは周知の事実だろう。アキレス腱の逸話で知られるアキレウスの死に関する物語や現代のコンピューターウィルスの名前としても残るトロイの木馬の物語とそれによるトロイアの落

¹ 以下、テキストは全て Perseus 所蔵の Loeb Classical Library のものを使用。

城、言い換えればトロイア戦争の終焉はヘクトルの葬送よりもさらに後の出来事なのである。『イリアス』終了時点ではアキレウスもトロイアの街もいまだ健在であり、冒頭でも述べた通り、描かれているのはトロイア戦争のごく一部に過ぎない。では『イリアス』で描かれる内容はトロイア戦争の物語全体の流れの中でさほど重要ではなく、戦争の中で多くの無名の战士们と数人の名の知れた英雄が死亡し、その葬送が行われただけの物語であるのかということ決してそうではない。既に『イリアス』本編の中でも『イリアス』以後の展開について後述する予言の中で触れられているように、確かに直接その場面が描かれることはないが、後述する岡論が示す通り『イリアス』の中でそれ以後の物語を含めたトロイア戦争物語の全体の結末を表現しようという詩人の意図を見出すことは十分に可能である。

それを成立させる要素のひとつとして予言を取り上げてみたい。というのも『イリアス』を予言、特に神やそれに類する存在によってある程度具体的な内容を伴って下される予言、を中心に追っていくと、アキレウスとヘクトルそしてパトロクロスとを共通の要素や共通の展開等によって結び付けることができ、さらにそれが上述の詩人の意図とも合致し、詩人の意図を達成するために予言が重要な役割を果たしていると考えられるからである。それに加えて、『イリアス』における予言に関する研究そのものもあまり見られない。アキレウスとヘクトルを比較する際の一要素として予言に対する返答や態度に言及する研究²や、『イリアス』をあやまちを伴う悲劇としてとらえそのあやまちの発端として予言に言及する研究³等はあるが、論拠として特定の予言を挙げるものが主であり、予言そのものを『イリアス』の構成や上述の詩人の意図に結び付けるようなものではない。そのため、詩人の意図を前提としつつ改めて予言を見直す意義は十分にあるだろう。そこで本論ではまず詩人の意図について岡論を基に説明した上で、共通性という点から予言が詩人の意図と関係していることを示し、さらに予言そのものの働きについて論じてみたい。

詩人の意図

岡によれば詩人の意図とは「トロイア攻略者アキレウス」を創造することであったという。本来であれば既に軽く触れた通り、トロイアを落城せしめたのはトロイの木馬の計略であり、人物でいうならば計略の考案者であるオデュッセウスということになるだろう。さらに言えばそれらの出来事は『イリアス』以後の話であって、『イリアス』の主題にはなりえないはずである。それに対して詩人は、「城市を滅ぼすもの」としてアキレウスを描き、ヘクトルをトロイア唯一の守り手として描くことによって「彼の死があたかもトロイアの陥落であるかのごとき印象をつくり出し」て「トロイア攻略者アキレウス」を創造したのだという⁴。

岡はさらにトロイアの陥落だけではなく、同じく『イリアス』以後の話であるアキレウスの死をも詩人は『イリアス』の中に描き出しているとする。それは主にヘクトルとパトロクロスの死によって表現される。詩人はテティスの予言(18. 95-6)によってヘクトルの死のすぐ後にアキレウスの死が訪れると示すことで、ヘクトルの死それ自体がアキレウスの死を予期させるものとしている。加えて、二人の運命の共通性の存在が同様にヘクトルの死をアキレウスの死と

² cf. J. Griffin, *Homer on Life and Death*, Clarendon Press, 1988. p.163

S.L. Schein, *The Mortal Hero*, University of California press, 1984. pp.182-85.

³ 岡道男,『ホメロスにおける伝統の継承と創造』,創文社,1988. p.24 註1 参照.

⁴ 岡 p.12.

してとらえることを可能としている⁵。また、パトロクロスは作中でアキレウスの武具を身にまとい、アキレウスの身代わりとして神話上のアキレウスの死に様と同様に死ぬ。直接描くことのできないアキレウスの死亡場面をパトロクロスの死を通じて描き、アキレウスの死を予期することを可能にしている⁶。

そしてテティスの予言を通じて詩人は「アキレウスの死とトロイアの陥落はいずれも休戦の後に「すぐに」起こるかのごとき印象、言いかえればこれら二つの出来事はほとんど同時に起きるかのごとき印象が生じる」という「同時性」を表現した⁷。これらにより本来時系列的に異なる場面であるヘクトルの死、トロイアの陥落、そしてアキレウスの死がひとまとまりとなって作中に存在できるようになり、『イリアス』の主題であるアキレウスの破滅の怒り（呪わしい怒り）について「主人公がプリアモスにヘクトルの死体を返還し二人が食事を共にして眠るときに終熄すると一般に見なされている」のに対して、『イリアス』の主題「アキレウスの怒り」の *τέλος*（結末、完成）はアキレウスとプリアモスとの和解ではなく、彼の死とトロイアの陥落である⁸と考える⁸ことができるようになると岡は述べている。

簡単にまとめ直すと、「トロイア攻略者アキレウス」を創造するというを前提としてアキレウスとヘクトルを描写しつつ、三人の運命と死の共通性を描くことによってアキレウスの死をも作中に描き出し、それらを同時性によって一体のものとする⁸ことで『イリアス』という物語の結末を単なるヘクトルの死からトロイア戦争物語そのもの結末として表現することが詩人の意図であったということになるだろう。

予言の示す共通性

詩人がその意図を達成するうえでアキレウス、ヘクトル、パトロクロスの三人を共通する要素つまり運命や死によって結び付けることで、アキレウスをトロイアの攻略者としつつ、アキレウスの死とトロイアの陥落とを物語の結末として『イリアス』作中に内包させたというのが岡の想定する詩人の意図であった。そして、上述した通り、『イリアス』を予言を中心に追っていくと同じくこの三人の間に共通する要素を見出すことができるのである。

注目すべきは予言と死という一連の流れの共通性だろう。詩人の意図を前提とするならば、アキレウス自身のそれは当然として、ヘクトルとパトロクロスの死もアキレウスの死と呼ぶことができるわけだが、そのアキレウスの死はテティスによる以下の予言によって予告されていた。

μήτηρ γάρ τέ μέ φησι θεὰ Θέτις ἀργυρόπεζα
διχθαδίας κήρας φερέμεν θανάτοιο τέλος δέ.
εἰ μὲν κ' αὐθι μένων Τρώων πόλιν ἀμφιμάχωμαι,
ᾧλετο μὲν μοι νόστος, ἀτὰρ κλέος ἄφθιτον ἔσται·
εἰ δέ κεν οἴκαδ' ἴκωμι φίλην ἐς πατρίδα γαίαν,
ᾧλετό μοι κλέος ἐσθλόν, ἐπὶ δηρὸν δέ μοι αἰὼν

⁵ 岡第1部第1章第3節参照。

⁶ 岡第1部第2章参照。

⁷ 岡 p.18.

⁸ 岡 p.21.

ἔσσεται, οὐδέ κέ μ' ὄκα τέλος θανάτοιο κιχέη. (9.410-16)

というのも私の母、銀の足の女神テティスは私を終わりへと導く二つの運命を語っている。もしここに残り、トロイア人たちの町を攻めるならば、帰還は叶わぬものとなるが、不滅の名誉が残るだろう。しかし、もし愛しき祖国の地へ帰るならば、立派な名声は得難いものとなるが、長い生命が私の下に残り、死の終わりが素早く私を捕らえることはないだろうと。

この予言が下される『イリアス』第9歌は戦線を離脱してしまったアキレウスを説得するため、ギリシア軍の中から三人の勇士たちが彼のもとを訪れるがアキレウスはその説得を受け入れず彼らを追い返すという内容である。その際、アガメムノンに対する怒りと並んでアキレウスが戦いに戻らない理由として挙げたのがこの予言であった。既にアキレウスには戦う気がなく、なおかつここで戦わずに帰れば長生きできると神から予言されているのだからその様にしようというわけである。その結果パトロクロスが死亡し、仇討ちのためにアキレウスは出陣を決意するわけであるが、するとテティスは次の予言をアキレウスに伝える。

ᾠκύμορος δὴ μοι τέκος ἔσσεαι, οἷ' ἀγορεύεις·
αὐτίκα γάρ τοι ἔπειτα μεθ' Ἑκτορα πότμος ἐτοῖμος. (18.95-6)

我が息子よ、お前の命は短いでしょう。そのように言うのだから。
というのもヘクトルの後すぐに死の運命があなたにも用意されているのです。

この予言によってアキレウスの死は確実に訪れるものとして再認識されることになる。アキレウスの物語にはテティスの予言を聞いたうえで戦わないことを選択し、その結果として戦わざるを得ない状況に陥り、それによってヘクトルの死＝アキレウスの死が訪れるという流れ、つまり予言を聞いたうえで行動した結果死ぬという流れが存在しているのである。さらに言えば、アキレウスは岡も指摘していた通り、短命の存在であるということが度々強調される人物であり⁹、そのことはアキレウス自身にも伝えられていた。これはテティスの予言が作中で語られる以前からのことであり、予言の内容以前の問題として彼は短命の存在であるということが運命づけられていたということになる。9歌におけるテティスの予言は一見アキレウスに対して選択肢を示しているように見えるが、その実彼がどう選択しようとも短命の運命しか待ち受けていなかった。実際に『イリアス』作中でも彼は戦わないことを選択したにもかかわらず、パトロクロスの死によって戦いと短命の運命へと導かれている。そしてそのパトロクロスの死もまたテティスの予言が語られる以前からすでにゼウスによって、神々の間でのことではあるが、確定事項として語られていた。

⁹ 岡 p.23.

οὐ γὰρ πρὶν πολέμου ἀποπαύσεται ὄβριμος Ἴκτωρ
πρὶν ὄρθαι παρὰ ναῦφι ποδώκεα Πηλεΐωνα,
ἤματι τῷ ὄτ' ἂν οἱ μὲν ἐπὶ πρύμνησι μάχωνται
στείνει ἐν αἰνοτάτῳ περὶ Πατρόκλοιο θανόντος: (8.473-76)

というのも、豪勇ヘクトルは足の速いペレウスの子が
船の側に立ち上がるまで戦いをやめないからだ。
それは彼らが死んだパトロクロスを巡って船尾で、
恐ろしい苦境の内戦で戦うその日のことだが。

アキレウスの短命はテティスの言葉によって彼自身も知るすでに決まった運命のはずであったが、それに反してアキレウスはテティスの表面上は選択肢があるように見えるも実際のところは短命の運命を語っているだけに過ぎない予言に対し戦わないことと長命を選択し、結局短命という本来の運命に導かれるのである。前述の予言から死に向かう流れに加えてその予言ないし運命にいったん逆らう、無視するような言動をとるというのもアキレウスの物語に含まれるということになるだろう。

それに対しヘクトルが受け取る予言は次のものである。

Ἴκτωρ υἱὲ Πριάμοιο Διὶ μῆτιν ἀτάλαντε
Ζεὺς με πατήρ προέηκε τεῖν τάδε μυθήσασθαι.
ὄφρ' ἂν μὲν κεν ὄρᾳς Ἀγαμέμνονα ποιμένα λαῶν
θύνοντ' ἐν προμάχοισιν, ἐναίροντα στίχας ἀνδρῶν,
τόφρ' ὑπόεικε μάχης, τὸν δ' ἄλλον λαὸν ἄνωχθι
μάρνασθαι δῆϊοισι κατὰ κρατερὴν ὑσμίνην.
αὐτὰρ ἐπεὶ κ' ἦ δουρὶ τυπείς ἢ βλήμενος ἰῶ
εἰς ἵππους ἄλεται, τότε τοι κράτος ἐγγυαλίζει
κτείνειν, εἰς ὃ κε νῆας εὐσσέλμους ἀφίκηται
δύη τ' ἥελιος καὶ ἐπὶ κνέφας ἱερὸν ἔλθῃ. (11.200-9)

プリアモスの子、ゼウスに匹敵する知を持つヘクトルよ、
父ゼウスは以下のことを伝えるようにと私を遣わした。
お前が人々の指揮者たるアガメムノンが前線において戦い、
人々の列を屠るのを見る間、お前は戦いから退き、
他の人々に対し激しい戦いを行うように命ぜよ。
しかし、彼が槍によって打たれるか、
矢によって射られるかして馬に飛び乗った時には、
ゼウスは打ち倒すための力をお前に与えるだろう。
お前が船々の下へやってきて、太陽が沈み、聖なる闇がやってくるまでは。

助言に近い形式のものであるが、ゼウスが確定事項としてこの先起こることを伝えるという意

味で予言ととらえることのできる文言である。これを受けたヘクトルはゼウスの言う通り、日が沈む(18. 239-242)まで活躍することになる。この直後ヘクトルの部下プリュダマスがヘクトルに対してアキレウスが出陣する前にトロイアの町まで撤退するように進言する(18. 254-83)。しかしヘクトルはゼウスに約束された日没以降もその場に残ることを決める(18. 285-309)。その際ヘクトルはその場に残る根拠としてゼウスの力添えによる優勢を挙げている。しかし、ゼウスの約束はあくまで日没までのため彼の発言はゼウスの意図、予言に反しているないし無視しているということになるだろう。そしてその結果としてヘクトルは死ぬ。ゼウスの予言とそれに対する対応がヘクトルの死の原因となったことはアキレウスとの決戦直前の彼自身の言葉からも読み取ることができる。

ὦ μοι ἐγών, εἰ μὲν κε πύλας καὶ τείχεα δύω,
Πουλυδάμας μοι πρῶτος ἐλεγχείην ἀναθήσει,
ὅς μ' ἐκέλευε Τρωσὶ ποτὶ πτόλιν ἠγήσασθαι
νύχθ' ὕπο τήνδ' ὀλοὴν ὅτε τ' ὤρετο δῖος Ἀχιλλεύς.
ἀλλ' ἐγὼ οὐ πιθόμην· ἦ τ' ἂν πολὺ κέρδιον ἦεν. (22.99-103)

ああ私よ、もし扉の内へ、城壁の中へ入れば、
プリュダマスが真っ先に私を咎めるだろう。
神のごときアキレウスが立ち上がったかの致命的な夜の間に、
彼が私にトロイア勢を町へと連れ帰るように要求したのだから。
しかし私は従わなかった。その方が遥かに有益だったにもかかわらず。

ヘクトルもまた予言を聞いたうえで行動しそれに反する、無視するような行動をとり死ぬという流れの中にいるということがいえる。

そしてパトロクロスについてだが、彼は神々から直接予言を下されたわけではない。彼が与えられたのはアキレウスによる助言ないし、命令であった。

νηῶν ἐλάσας ἰέναι πάλιν· εἰ δέ κεν αὖ τοι
δώη κῦδος ἀρέσθαι ἐρίγδουπος πόσις Ἴηρης,
μὴ σύ γ' ἄνευθεν ἐμεῖο λιλαίεσθαι πολεμίζειν
Τρωσὶ φιλοπτολέμοισιν· ἀτιμότερον δέ με θήσεις·
μὴ δ' ἐπαγαλλόμενος πολέμῳ καὶ δηϊοτήτι
Τρῶας ἐναιρόμενος προτὶ Ἴλιον ἠγεμονεύειν,
μὴ τις ἀπ' Οὐλύμποιο θεῶν αἰειγενετῶν
ἐμβήη· μάλα τούς γε φιλεῖ ἐκάεργος Ἀπόλλων·
ἀλλὰ πάλιν τρωπᾶσθαι, ἐπὴν φάος ἐν νήεσσι
θήης, τοὺς δ' ἔτ' εἶν πεδίον κάτα δηριάσθαι. (16.87-96)

追い立てた後は船々から引き返すのだ。
たとえ雷を鳴らすヘラの君が榮譽を与えたとしても、

戦いを好むトロイア人たちと戦おうと望んではならない。
お前が私を不名誉なものとすることになるだろうから。
また、戦いと切り合いに喜び、トロイア人たちを屠りながら
イリオスの前まで行ってもならない。
不死なる神々の誰かがオリュンポスからやってくることはないように。
特に遠矢のアポロンは彼らを好んでいるからな。
だから戻ってくるのだ、光を船にともしたならば、
未だ戦っているものは平原に残してくるのだ。

しかし、このアキレウスの言葉は予言に類するものにとらえるのに十分な根拠を持っている。
というのもアキレウスはこれ以前にテティスから次のような予言を下されていた。

μη δὴ μοι τελέσωσι θεοὶ κακὰ κήδεα θυμῶ,
ὥς ποτέ μοι μήτηρ διεπέφραδε καὶ μοι ἔειπε
Μυρμιδόνων τὸν ἄριστον ἔτι ζῶοντος ἐμεῖο
χερσὶν ὑπο Τρώων λείψειν φάος ἡελίοιο. (18.8-11)

神々が私の胸の内の悪しき予感を満たさなければよいのだが、
かつて母が私に語ったようなことを。
私が生きているうちに、ミュルミドネス人たちの中で最も優れたものが
トロイエ勢の手によって日の下を去るのだと。

上述のアキレウスの言葉は神の予言という明確な根拠の下に語られているのである。さらに言えば、アキレウスは人間の中でも神々に近い特別な存在であり (24. 56-61)、ヘクトルもアキレウスほどではないが神々から特別好かれていた (24. 65-67) ため、神から直接予言を授かることのできる関係にあるが、パトロクロスはそのような関係にはないためアキレウスの口を通して伝えられるのが自然であったと考えることもできるだろう。ともかく、パトロクロスは以上のような予言のごとき言葉を伝えられたうえで戦場に向かうのだが、彼はギリシア軍の船を救った後アキレウスの言葉に従わず、スカイア門までトロイア勢を追撃してしまい、ヘクトルに討たれることになる。ここでも予言を聞いたうえでそれを無視するような行動をとり死ぬという流れが存在するということがわかる。

アキレウス、ヘクトル、パトロクロスの物語にはそれぞれ予言ないしそれに類する言葉を授かり、それに対して同様の対応を取ったうえで死ぬという共通の流れが存在する。詩人の意図を前提とするならば、後者二人の死は各々アキレウスの死の要素を共通性や同時性といった形で含み、予期させるもののはずである。二人の死は予言とそれに伴う行動そして死というアキレウスの物語の流れを取り入れたものであり、その流れ自体の共通性がアキレウスの死を予期させると考えられるだろう。そしてそれを成立させる予言もまた詩人の意図と密接に関わる要素である。

さらに、ヘクトルとパトロクロスの共通性が示される予言を伴う場面が存在する。パトロクロスはヘクトルに討たれ、そのヘクトルはアキレウスに討たれるわけだが彼らはそれぞれ自分

を討った者に対して予言を遺している。

ἄλλο δέ τοι ἐρέω, σὺ δ' ἐνὶ φρεσὶ βάλλεο σῆσιν·
οὐ θην οὐδ' αὐτὸς δηρὸν βέη, ἀλλά τοι ἤδη
ἄγχι παρέστηκεν θάνατος καὶ μοῖρα κραταιή
χερσὶ δαμέντ' Ἀχιλλῆος ἀμόμονος Αἰακίδαο. (16.849-54)

しかし、さらに私は言うのだ。お前の胸の内に刻んでおけ。
お前自身も長い人生を生きることはないであろう。
すでにお前のそばには死と、
アイアコスの子偉大なるアキレウスの手によって死ぬという抗いがたい運命がある。

φράζεο νῦν, μὴ τοί τι θεῶν μήνιμα γένωμαι
ἤματι τῷ ὅτε κέν σε Πάρις καὶ Φοῖβος Ἀπόλλων
ἐσθλὸν ἐόντ' ὀλέσωσιν ἐνὶ Σκαιῆσι πύλῃσιν. (22.358-60)

今お前も考えておけ。私が神々の怒りを買う理由とならないように。
お前をパリスとポイボス・アポロンがスカイア門において、
お前も確かに勇敢ではあるが、滅ぼすその日のことを。

この場面は岡も指摘する通り¹⁰そこに至るまでの一連の流れにおいて、アキレウスの武具を身につけてあやまちを犯し窮地に陥り敗北し、勝者が敗者を侮辱、敗者による死に関する予言、勝者の予言に対する返答という全く同じ構成をとっている。また、予言を下されるという側面から見ればアキレウスとヘクトルの共通性と見ることもできる。アキレウスが予言を遺したかについては彼の死亡場面は『イリアス』作中では直接描かれないので想像に任せるしかないが、少なくとも彼らの共通性を示すうえで予言が有効な手段であると詩人によって認識されていることは間違いないだろう。

予言の役割

共通性以外にも『イリアス』における予言には特徴が存在する。そしてそれもまた詩人の意図を前提としたとき、重要な意味合いを見出すことができる。ここでは予言の変化、予言の配置、そして聴衆に伝えられる予言について考えてみたい。

既に触れたがアキレウスは母である女神テティスから予言を授かっていた。その予言は9歌においては二つの道があるかのように見えていたが、実際には彼の短命は定められた運命であり、結局18歌で彼の死は改めて予言されることになる。当初は死が確実ではないものであるかのように語られていたのが、確実なものとして語られるようになったという意味で予言が物語の進行に伴ってより正確な形に変化したといえることができるだろう。しかし、彼に対して下される予言はそこで終わらず、さらに増えていくことになる。19歌ではヘラ女神がクサント

¹⁰ 岡 pp.41-42.

スという馬の口を借り、次のように告げる。

ἀλλὰ σοὶ αὐτῷ

μόρσιμόν ἐστι θεῶ τε καὶ ἀνέρι ἴφι δαμῆναι. (19.416-417)

しかし、とある神ととある勇敢な戦士によって
打ち負かされる運命があなたに定められているのです。

ここではさらにアキレウスの死がとある戦士、それも神の力を借りた戦士によるものであることが明らかになる。そしてその後アキレウス自身の口から、予測という形ではあるが、彼が戦場で死ぬだろうということが語られる。

ἔσσεται ἢ ἠὼς ἢ δαίτη ἢ μέσον ἡμαρ

ὀππότε τις καὶ ἐμεῖο Ἄρη ἐκ θυμὸν ἔληται

ἢ ὅ γε δουρὶ βαλὼν ἢ ἀπὸ νευρῆφιν ὀϊστῶ. (21.111-3)

それは朝か夕方かもしくは昼になるだろう、
何者かが私の命を戦場において、
槍を投げてかもしくは弦から放つ弓でもって奪うのは。

ここでは彼が手段として弓に言及していることが重要だろう。実際にアキレウスは弓で撃たれて死ぬのだから。そして最後に前節で挙げたヘクトルの遺した死の間際の予言によって戦士の正体が明らかになる。ここでは物語の進行に合わせてアキレウスの運命と死の詳細が明らかにされるという構成に注目すべきだろう。というのも18歌のアキレウスに対する予言の変化はそれまで戦線から離脱していた彼が戦場へ向かうことを決めるという重要な場面に伴うものであり、元から短命であると定められていたとはいえ、彼の決意と同時に予言が二つの道から一つの道へと変化する場面である。そこから物語の最高潮であるヘクトルの死亡場面に至るまでの間に少しずつアキレウスの死の詳細が明らかにされていき、ヘクトルの死亡、詩人の意図によってトロイアの滅亡とアキレウスの死と同時に起こるものとしてとらえられるそれとまさに同時に完全に明らかになるのである。

次に予言の配置について考えてみたい。すでに見た通り、ヘクトルとパトロクロスは揃って死の直前に予言を遺していた。これらは死亡場面の構成の共通性としてとらえられるわけだが、言い換えれば彼らは物語からの退場の直前に予言を遺した、彼らの退場のタイミングに予言が配置されたということになる。そのことに意味を見出すことができないかということである。では逆に彼らに予言が下されたのがいつなのかということを見ると、ヘクトルは11歌でゼウスが力を貸すだろうという予言を下され、その通りそこから彼が活躍しギリシア勢を追い詰めることになった。そして、前節と同様にアキレウスの言葉を予言であるとするならば、16歌のパトロクロスが出陣し活躍する場面の始まりにパトロクロスに対する予言が下される。パトロクロスの活躍場面は16歌の内にヘクトルとの遭遇と敗北によって終了しヘクトルに対して再び予言が、彼の死に関する予言が下される。そこからヘクトルは17歌でパトロクロスの

身にまとったアキレウスの武具を奪い、18歌でゼウスの予言に反した決断をし、彼の死とそれを通じたアキレウスの死という物語の結末に向けての段階を踏んでいく。同じく18歌でアキレウスの死の予言も下され、物語全体がアキレウスとヘクトルの死に向かって進んでいくことになる。ヘクトルは22歌で死亡し、アキレウスに予言を遺す。そしてアキレウスを中心にパトロクロスとヘクトルの葬送までの流れが描かれることになる。こうして見ていくと、特にパトロクロスが顕著だが、予言はそこで語られる登場人物が活躍するもしくはその人物にとって重要な要素が描かれる場面の前に配置されている。そして二人の死に際し予言は場面と人物が切り替わる場所に置かれている。これは、予言の性質上ある意味当然ではあるのだが、これから誰に何が起きるのかということをお聴衆に理解させる働きが予言にあるからだと思われる。パトロクロスの死もヘクトルの死も詩人にとっては特に重要なアキレウスの死を表す場面のはずである。しかし、『イリアス』には数多の登場人物がおり、例えば17歌はヘクトルにとってもアキレウスの死の要素を回収する重要な場面であるが、一方でメネラオスなどの活躍も描かれている。そして彼らの行動具体的にはパトロクロスの死体を持ち帰ることも物語の進行上必要な要素である。そうした他の登場人物の動向を必然的に描きつつも、特に重要な人物に注意を向けさせるために事前に予言によってそれらを示すのだろう。

最後に聴衆に対して伝えられる予言について考えてみたい。『イリアス』には神々間の会話や地の文において語られる、登場人物には知る由もなく物語に直接作用することのない予言が存在する。すでに挙げたパトロクロスの死を語るゼウスの予言の他にも、ヘクトルの死やトロイアの陥落まで語られている。

Ἔκτορα δ' ὀτρύνησι μάχην ἐς Φοῖβος Ἀπόλλων,
 αὐτίς δ' ἐμπνεύσῃσι μένος, λελάθη δ' ὀδυνάων
 αἶ νῦν μιν τεύρουσι κατὰ φρένας, αὐτὰρ Ἀχαιοὺς
 αὐτίς ἀποστρέψῃσιν ἀνάγκιδα φύζαν ἐνόρσας,
 φεύγοντες δ' ἐν νηυσὶ πολυκλήϊσι πέσωσι
 Πηλεΐδew Ἀχιλλῆος; ὃ δ' ἀνστήσει ὄν ἐταῖρον
 Πάτροκλον: τὸν δὲ κτενεῖ ἔγχρῃ φαίδιμος Ἔκτωρ
 Ἰλίου προπάροιθε πολέας ὀλέσαντ' αἰζηοὺς
 τοὺς ἄλλους, μετὰ δ' υἱὸν ἐμὸν Σαρπηδόνα δῖον.
 τοῦ δὲ χολωσάμενος κτενεῖ Ἔκτορα δῖος Ἀχιλλεύς.
 ἐκ τοῦ δ' ἄν τοι ἔπειτα παλίωξιν παρὰ νηῶν
 αἰὲν ἐγὼ τεύχομι διαμπερές εἰς ὃ κ' Ἀχαιοὶ
 Ἰλιον αἰπὺ ἔλοιεν Ἀθηναίης διὰ βουλᾶς. (15.59-71)

そしてポイボス・アポロンはヘクトルを戦場へ駆り立て、
 また再び力を吹きかけ、今彼の心を苦しめている体の痛みを忘れさせる様にせよ。
 そしてアカイア人たちは力なき敗走へと陥らせ、向きを変えさせて、
 逃れた後にペレウスの子アキレウスの漕ぎ座の多い船で死ぬようにさせよ。
 すると彼は仲間であるパトロクロスを立てせるだろう。
 そして名高きヘクトルがパトロクロスをついてイリオスの前で槍によって殺すだろう。

パトロクロスも自身も多くの勇士を殺した後のことであり、
その中には我が息子神のごときサルペドンもいるのだが。
そして、彼の死に怒った神のごときアキレウスがヘクトルを殺す。
それから、トロイア人たちが船から退いた後、以降私がずっと力を貸す。
アカイア人たちがアテナの計略を通じて高きイリオンを攻略するその時まで。

ὄφρα μὲν Ἐκτωρ ζωὸς ἔην καὶ μῆνι Ἀχιλλεύς
καὶ Πριάμοιο ἄνακτος ἀπόρθητος πόλις ἔπλεν,
τόφρα δὲ καὶ μέγα τεῖχος Ἀχαιῶν ἔμπεδον ἦεν.
αὐτὰρ ἐπεὶ κατὰ μὲν Τρώων θάνατον ὄσσοι ἄριστοι,
πολλοὶ δ' Ἀργείων οἱ μὲν δάμεν, οἱ δὲ λίποντο,
πέρθετο δὲ Πριάμοιο πόλις δεκάτῳ ἐνιαυτῷ,
Ἀργεῖοι δ' ἐν νηυσὶ φίλην ἐς πατρίδ' ἔβησαν,
δὴ τότε μητιῶντο Ποσειδάων καὶ Ἀπόλλων
τεῖχος ἀμαλδῦναι ποταμῶν μένος εἰσαγαγόντες. (12.10-18)

ヘクトルが生きており、アキレウスが怒り、
プリアモス王の町が陥落していなかった時、
その時にはアカイア勢の強大な壁もしっかりとしたものだった。
しかし、トロイアの勇敢なる者たちが死に、
アルゴス勢も多くが死んだが、いくらかが生き残り、
プリアモスの町が十年目に陥落し、
アルゴス人たちが愛しい祖国へと船出したその時、
ポセイドンとアポロンが流れ入る河の力で壁を壊すことを企てた。

これらの予言は、特に後者は地の文であるため、他に聞く者がいない以上当然聴衆に向けて語られていると考えるべきである。ではなぜ聴衆にこれから起こることを、『イリアス』作中では描かれないトロイアの滅亡まで含めて伝える必要があるのか。それは、本来のトロイア戦争物語の結末を慣習に意識させることが重要だからではないだろうか。岡は詩人の意図、つまり「トロイア攻略者アキレウス」を生み出すことを詩人の独創性と称した。なぜそれが独創的足りえるのかと言えば、本来のトロイア戦争物語の結末では、上記の予言でいうところのアテナの計略、オデュッセウスのトロイの木馬による落城が伝統的かつ一般的な解釈であったのに対して、アキレウスという人間がトロイアを攻略したのだという新たな解釈を示したからであった¹¹。その新たな解釈を際立たせるには、そもそもの一般的な解釈を聴衆が共有し、『イリアス』に触れるに際し意識している必要がある。だからこそ詩人は折に触れて、予言という形で聴衆にそれらを示したのではないだろうか。さらに『イリアス』作中にはより直接的にアキレウスによるトロイア攻略を否定するような場面が存在する。

¹¹ 岡 p.29(1)参照.

‘χάζεο διογενές Πατρόκλεες: οὐ νύ τοι αἴσα
σῶ ὑπὸ δουρὶ πόλιν πέρθαι Τρώων ἀγερώχων,
οὐδ’ ὑπ’ Ἀχιλλῆος, ὅς περ σέο πολλὸν ἀμείνων. (16.707-9)

引き下がれ、ゼウスの血を引くパトロクロスよ。
気高きトロイアの町をお前の槍によって滅ぼす定めにはない。
お前よりも大いにすぐれたアキレウスによってできえないのだ。

νῦν δ’ ὅτε δὴ καὶ θυμὸν ἐταίρου χόεται αἰνῶς
δεῖδω μὴ καὶ τεῖχος ὑπέρμορον ἐξαιπάξῃ. (20.29-30)

彼が友人の死に関して怒っている今、運命を超えて
壁をも攻略してしまうのではないかと私は恐れているのだ。

前者はアポロンによるパトロクロスに対する警告、後者はゼウスによるアキレウスに対する危惧であり、どちらもアキレウスによる攻略をあってはならないこととしてとらえている。これに関して岡は伝承の反映であるとするにとどめている¹²。確かに『イリアス』が伝承を基として作られた物語である以上、伝承とまったく違う結末を描くことは不適切ということになるだろう。トロイア攻略者アキレウスというのもあくまで解釈の余地の話であり、伝承そのものを否定するわけではない。そういう意味ではあくまで伝承には従っているのだという詩人によるある種の保険ということもできるのかもしれない。しかし、岡が詩人の意図の一端として述べていたように、『イリアス』にトロイア攻略を神々の計略による神話的な物語から人間による物語へ創りかえる意図があったのであるならば、神の予言とは違う結末を作り出す人間という描写自体に意義があったのではないだろうか。決して伝承そのものを完全に否定してしまうわけではなく、あくまでこの後木馬は出てくるという前提の上で、しかし、作中で神が度々予言し印象付けられ聴衆も伝承として知っている神の想定するトロイア攻略物語を人間が超えて、これまでとは違うものを作り出したのだということを強調するために、一度ありえないものとして否定したうえでヘクトルの死によって改めてトロイアを攻略させたと考えることもできるのではないだろうか。

総括

『イリアス』の物語に岡の言う通りアキレウスをトロイア攻略者としようという意図が存在したというのはおそらく間違いないだろう。それは主にアキレウス、ヘクトル、パトロクロスに関する描写、共通性や同時性などによって達成されていた。その三人各々に予言やそれと同等の助言が伴っているというのは『イリアス』本編に書かれている通りである。予言の存在自体が彼らに予言と死を伴うアキレウスの物語という共通性を与えていた。そしてその物語の進行する中で予言の変化もまたアキレウスの死とヘクトルの死の同時性を示し、予言の配置によってそれらを読み取るための要素へ注目できるよう配慮されていた。予言によって未来を語り、

¹² 岡 p.15.

聴衆に伝承通りのトロイア攻略物語を印象付けつつ、しかし『イリアス』は違うのだということ 강조했다。予言が詩人の意図の達成において重要な意味を持ち、さらにそれを聴衆に伝わりやすくするための働きを持っていたということが言えるのではないだろうか。